

賓 主 未 分

久 松 眞 一

被認識者なきときは認識されないとか、或は認識者なきときは被認識者はないとか、いふやうな賓主の分離は根本的實在の直接状態ではない、嚴密にいふと認識されぬものを被認識者といふことはできぬ、それ故に認識者なくとも被認識者が依然として存在するといふやうなことは妥當でない、眞實在に於ては被認識者と認識者と一體である、それで認識者を被認識者といふこともでき被認識者を認識者といふこともできるのである、それ故被認識者が認識者を認識するといふこともでき、認識者が被認識者を認識するといふこともできるのである。

それ故認識者も被認識者も固定したものではない、普通には被認識者は多元的のものであつて認識者は一元的と考へて居るのであるが、若し此一元的といふ意味が被認識者の多元を排除する一元であつて、多元と對立して固定されて居るやうな者であるならば、夫は最早眞の意味での認識者ではない、それ故若し「認識者で被認識者

を認識する」といふ場合には其認識者は最早認識者ではない、却て被認識者であるのである、夫で被認識者から分離さるゝものとして考へられたる認識者は只名のみなるに止まりて眞の認識者ではない、又認識者から分離されたるものとして考へられたる被認識者は同じく名に過ぎずして眞の被認識者といふとはできぬのである。

かく根本實在に於ては被認識者と認識者とは同一物であるから、すでに被認識者を被認識者といふのも、亦認識者を認識者といふのも嚴密にいふと不妥當である、強ていはゞ唯一の根本實在が存在するのみである。この實在は普通實在論者がいふ如き認識者より獨立に存在する被認識者としての實在ではない、又認識者と認識者より獨立に存在する被認識者としての實在との間に生れる現象といふ如きものでもない、即ち認識者と被認識者との綜合によつて成立するものではない、認識者と被認識者とが意味に於ても亦時間に於ても實在より先行するといふやうな關係にある實在ではない、却つて賓主未分の唯一状態である、こゝに於ては主觀が客觀の内に含まれ客觀が主觀の内に溶け込んで居るといつても真相を語るものではない、それでその實在をば認識といふのも最早假語に過ぎぬ、然しながら今これをかりた認識といふ作用の方面よりいへば認識者であり、存在するといふ事實の方面よりいへば

Seinである、それで此場合には同一物が主であり客であるのである、即ち主観が客観を認識するといふことは主観が自己以外の或物を認識することではなくして自己を認識することである、更に主観が客観を認識するといふことに止まらずして客観が主観を認識するといふことになるのである、かくの如き主観が自己を認識することを吾々は創造と呼ぶ、而してかゝる主観は神と稱せらるゝものである、又かくの如き客観が主観を認識することを吾々は物自身の自覺と呼ぶ、これは即ち眞實相である、故にかゝる主観は無内容なる抽象的自我といふやうなものではなくて内容から不分離の、即ち即内容としての具體的自我である、客観のいかに微小なる部分と雖もこの主観の眼から匿れることはできぬ、即ちこの主観は全體であつて客観の内面的具體的統一と見ることもできる、然しこの統一は決して主観が自分と異なる他のものを統一するのではなくて自分自身の統一である、換言すれば自分を自分の中に見出すことである、ヤコブ、ボエームが父はたえず子を生み、其子の力若しくは光は全父の中に反映すると考へたのもこの意味である、更にこれは自分は自分であるといふことに外ならぬ、而してこの場合自分は自分であるといふ事は絶対獨立自存の意味をその内に含まなければならぬ、何となれば此主観は夫以外に何物をも認めない

からである、従つて主觀は自己以外のものより刺戟を受け、或は自己以外の者に向つて刺戟を興へるといふやうなことはあり得ない、それ故主觀には決して窓はない、窓がないといふ意味は閉して居るといふ意味ではなくして全體即ちいひ得べくべき唯一モナードであるといふ意味である、故に又主觀の認識作用即ち創造といふことは常に向內的反省 (Reflexion in sich) であつて、自己を自己内容に限定することに過ぎぬこととなる、創造に當つて自己以外のものより材料を得、或は自己以外のものを造つて行くといふやうなことはない、カントは從來の心理主義及び實在論等を批判しん吾々の普通所謂外界と主觀とはしかく明了に區別すべきものにあらずしてむしろ、その外界は主觀の創造であると主張しながら、この創造の際に主觀以外の世界より創造の内容をかり來らんとして居るが、之は尙カントが主觀の意味を十分に徹底させないで客觀から獨立に存在して居るものであるといふ從來の實在論を暗々裡に信じて居た爲ではなからうか、カントは從來の主客論に於ける主觀と客觀との間に存する不可踰の溝渠をば主客觀の銳利なる批評によつて取り去り得る状態迄進みながら、主觀を無内容なる形式となし終つたが爲に眞實在として老へらるべき世界をば現象界といふ名によつて主觀界に墮してしまつた、而して彼はそれが爲に主

観とは離れたる客観をば表門に排斥しながら裏門からは潜かに入れなければならぬやうなことになつてしまつた、かくて彼は依然として二元論に止まらざるを得なかつた、従つて主観の創造には客観をかり來らねばならなかつた、而してこれを借りて來る方法、即ち主観と客観との關係の形式をば恰も心理主義の如く主観の受感性といふものに求めた、所謂現象界とはこの受感性の門を通過して、その受感性の形式たる時間空間によつて改造されたる客観界である、勿論カントの謂ふところの主観は心理主義の如く感官的のものではないけれども自己以外のものから離れて存在して居つて、それから刺戟を受けて、その刺戟が自己内容を構成するといふ點は進歩せる心理主義と見ることもできる、それで主観は改造されたる客観のみを認識することはできるが、改造さるゝ前の客観は認識し得ないものとして、この客観をば未解決のまゝで不可知として放棄した、それ故カントに於ても矢張り主観と客観との根本問題は決定されなかつたと見ることができ、カントが吾々の認識する世界は主観の造つたもの、或は嚴密にいへば改造したもので客観自身ではなく、客観自身は吾の認識の及ばぬところであるとして吾々の認識の限界を定めたといふことは從來の實在論や模寫説よりはるかに進歩した點と見なければならぬのである、その進

歩したといふのはカントが認識の批判によつて認識に於ては主観と客観とは從來考へられて居つたやうに全然別なものでなくて密接不離なる寧ろ同一物であるといふ根本實在の事實に近づいて來たところにあるのである。然しながら尙カントは吾人の所謂賓主未分の境地に體達せずして自ら賓主分離の二元的立脚地を捨てることが出來なかつたが爲に現象界といふ尊き世界を發見して置きながら客観と對立する主観の立場からそれを説明せんとすることによつて不徹底なる不純なる者になしてしまつた。カントは現象界以外に何物をも求むる必要はなかつたのである、吾々が認識する主観をば認識さるゝ客観以外に存在するやうなものでないものとし客観をば認識するもの以外に存在するやうなものでないものとしたならば、この現象界は現象界でなくなつて實在界となるのである。かゝる實在界は批評前の實在の中へ實在界と對立する主観を奪ひ來り、批評主義の主観界の中へ主観を刺戟する物如界をば融合するものである。それでこの世界に於ては主観の受感性の形式とせらるゝ時間及空間は同時に又客観の存在の形式でなければならぬ。主観の受感といふことは客観即ち自己の認識である。即ち主観の自己限定である。主観の自己限定とは内への創造であつて、主観内容の自覺である。この主観内容の自覺が個物の存在で

あつて、多様性である、而して受感性の形式と稱せらるゝ時空は創造の根本形式であつて、主観そのものである、即ち創造の作用として見られたる主観が時間であり、創造の結果即ち個物の存在として見られたる主観が空間である、時空が多様性の統一であるといふことは主観が創造及存在の根本統一であるといふことである、時間及空間が遂には時間に歸一するといふことは時間と空間とが結局は根本實在に於て一であるといふことである、斯の如く時間及空間を觀てくると時間にも空間にも常に内容があるといはねばならぬ、否むしろその内容も時空なくしては存在し得ないし、又時空も内容なくしては考へられぬといふことになる、而してこの時間はその内容の創造者であつて、而もその内容をば内に創造するのであるから、その内容は時間の中に時間と融合して存在せなければならぬ、時間は決して單に時間内容から離れて抽象的に存在するやうなものではない、時間とその内容とは同時に存在し、又同時に成立するのである、經驗論者はこの個々の内容の中に時間を發見せんとするのであるから、時間は變化の中に存在するとし、變化なくしては時間は存在することができぬと考へて居る、しかし先驗論者は時間の中に内容を見出さうとするのであるから、時間なくしては何者も存在し得ないとするのである、前者は客觀なき主観はないと

いふことであるし、後者は主観なき客観はないといふことであつて、何れを眞、何れを偽といふこともできぬ、何れも一物の異なる言表はしに過ぎぬ、新カント派のロールが純粹なる先驗論に満足することできざずして時間表象の構成に於て經驗論を取込んで居るのは客観なき主観はないといふ一面を無視することができなかつた爲でなからうか、又思惟を以て最根本的のものとし、認識及判断をば直観によつて與へられたる與件即ち多様性をば結合したり分析したりする作用と見るカントの考をば徹底觀念論の見解の鋭鋒を鈍らするものであるとして居るナトルプが數は純粹思惟の根本性質から定立したに拘はらず、時間には數に「存在」を關係せしめて定立したの「は、た」とへ此「存在」が思惟以外にある「存在」といふ如きものでなくして思惟が内面的に要求するのであるにしても時間は内容なしには考ふことはできぬ、といふことを暗示して居るものではなからうか、若し時空が純粹に先驗的に考へ得るものであるならばナトルプは思惟そのものゝ二つの根本作用より定められたる純粹數だけを以て時空を定立してもよいやうに思はるのである、ナトルプが純粹思惟を最根本的のものとし、カントの所謂多様性といふやうなものをば素性も知れぬディング、アン、ジヒといふやうなものに關係せしめないで、兎も角も思惟の内面的要求より定立せ

んとしたのは一段の進歩と見なければならぬ、即ちポントの陥つた二元論の一救済である。然しながらナトルプは純粹思惟の根本作用たる決定 (Bestimmen) 若しくは定立 (setzen) と被決定者 (das zu Bestimmende) 或は被定立者 (das zu Setzende) との關係をいかやうに取扱つて居るであらうか、彼は思惟によつて決定さるべきものをば思惟以外に求めずして思惟が考へ出す (erdenken) 問題 (Problem, Frage) としたのであるが、この思惟に對して思惟が考へ出す問題とは如何なる意味であらうか、若し思惟が純粹に定立作用であるならば、思惟が定立すべきものであるところの「問題」といふやうなものはあるべき筈でない、若し思惟が決定すべきものをば思惟が考へ出すといふ場合には、その思惟は定立作用としての思惟とは何か異つたものになりはすまいか、若し異つたものになるならば、思惟主觀とその對象との間には一の溝渠が築かるゝわけである、たとへ一元的活動からその内容を創造するにしてもその活動とその内容との關係如何によつて二元論に墮することゝなるのである、思惟作用とは被思惟者の存在といふことであらねばならぬ、然るに先驗論は思惟作用を先にしてこれによつて被思惟者を説明せようとするからそこに難關を生ずるのである、ナトルプが純粹なる思惟の一元論を徹底せようとするならば、思惟主觀と思惟客觀との合一否な同一、即ち根

本實在より出發すべきであつた、即ち思惟主觀そのものが思惟客觀そのものであると考ふべきである、この場合には客觀は生きた者であつて全體に充實せる自覺を持つて居る、これは客觀が *essentia* *in se* に存在するといふことであつて判斷の形式からいへば *A* *ist* *A* である、*A* は *A* であるといふことは *A* が何か他のものによつて *A* であるといふことではなくして、自足獨立で完全に存在して居るといふことである、而してこの判斷は自己を以て自己を叙述するのであつて、叙述の最完全なるものといはなければならぬ、この叙述に於ては賓辭は完全に主辭と同一であつて、賓辭によつて主辭に微塵の増減もない、これは又 *A* 自身の判斷であつて *A* 以外のもの若しくは *A* の部分の判斷ではない、それでこの *A* は何かある特別の立場から見られたる *A* ではない、一切の立場をはなれて見られたる *A* である、一切の立場から離れて *A* を見るといふことは無限の立場から *A* を同時に見るといふことに近いのであるが如何に立場を無限にしてもその立場から離れて *A* を見るといふことはできぬ、見者が立場を離るゝためには見者自身が *A* にならなければならぬ、この場合に見るものが *A* を見るといふことは *A* が *A* を見るといふことになるのである、*A* が *A* を見るといふことは經驗の最も真なるものである、即ち主觀の最も純粹なる作用である、これは主觀

主義の出發點である、更にAがAを見るといふことはAがAであるといふことでここに於て主觀が客觀の形即ち存在の形を取つて來る、而してAがAであるといふことはAが在るといふことである、Aがあるといふ場合には尙そこに「ある」といふ働きがあるのであるがAがあるといふことは「A」といふことであるとなると「A」は最も純粹の實在である、即ち客觀の最純粹なるものである、之は客觀主義の出發點である、然し今AがAを見るといふことは「A」といふことゝ何等異つた事ではないから主觀の作用と客觀の實在とは同一物である、普通吾々の認識するとせぬとに係らず存在して居ると考へられて居る實在は此「A」であり、認識者或は思惟がなかつたならば實在もあることはできぬ、存在とは決定すべきもの、絶對存在とは絶對に決定されたもの、而もかゝるものは「不可知的永恆の問題」なりとする思惟はAはAなりといふ純粹な作用でなければならぬ、而してこの思惟の最上の目的即ち思惟の完成とは「A」でなければならぬ、ナトルプの所謂絶對に定立されたものは此「A」でなくてはならぬ、而して思惟の目的とは思惟以外のものであつてはならぬ、思惟自身でなければならぬ、思惟自身とは又實在自身である、神と自然とは同一物である、神即自然、自然即神である、正偏回互である、それで吾々は一切のものを主觀と見ることもできるし、又一切の

ものを客觀と見ることでもできる、吾々が常に内界とか外界とか稱して居るものも同一物である、之を異るものとするが故に摸寫説も難點を生ずるのである、今主觀が客觀をば完全に摸寫するとは主觀が客觀になるといふことである、而して此場合には最早摸寫でなくして客觀そのものである、普通に謂ふ所の摸寫は何かある立場から對象を見ることになるからその對象は一度批評主義の篩にかけられねばならぬ、この篩によつて摸寫する主觀と摸寫される客觀との間の境界が除かれるならば摸寫説は妥當なる考へといはねばならぬこととなるのである、何者主觀が客觀を完全に摸寫するといふことは主觀が客觀になり、客觀が主觀になるといふことであつて、これは根本實在の真相であるからである、かの三昧の境地といふのもかゝる状態をいふに外ならぬ、主客の兩鏡相照してそこに些の差別を止めない状態である、而してその差別を止めないとは、主としては主はどこまでも主であり、客としては客はどこまでも客であるといふことである、即ち主は主であるといふことは客は客であるといふことである、永平の道元が「上乘一心ハ土石砂礫ナリ、土石砂礫ハ一心ナルガ故ニ土石砂礫ハ土石砂礫ナリ」といふ如きはこの消息を漏したものであらう、即ち客觀が客觀であるといふこと以外に主觀はない、主觀が主觀であるといふことを除いて客觀

はないのである、東坡の溪聲靈雲の桃花、香嚴の擊竹、皆是れ主觀客觀を蟬脱して未分の根本實在に體達したるものである。この場合には聲を聞くものは單に聲のみであり、花を見るのは花だけである。主觀が花以外にあつて花を見るのでもなければ、花が主觀を見るのでもない。花が花を見るのである。かの邵子の所謂「以物觀物」ものである。而してこの物を以て物を觀るといふことは物以外に物があつて物を觀るのではないから物が自分自身を觀ることである。物が自分自身を見て行くといふことは根本實在の根本作用である。即ち神自身の働きである。創造である。神から一切のものが流出するとは神以外に流出するのではなくして、神の内に流出するのでなくてはならぬ。神に於ては外といふことはあり得ない。外がないとは神が自足の全體であるといふこととて、デオニシスの所謂「神はそれ自身の中に流出する泉でなくてはならぬ」とは此意味に外ならぬ。而して神は自分以外のものを創造せないからして、エックハルトのいふ如く「神の前には新しきものはないのである。又舊きものもない。何者神は一切處一切時に遍在して居るからである。それであるから神は永恒の今である。永恒の今といふことが神の無限創造の真相である。吾々は創造といふ文字に捕はれてはならぬ。眞の創造は何物をも創造せないことである。それ故にそこには又創造されたる何物

もないのである、こゝが眞一の端的である、所謂識神の離脱である、スコッス、エリゲナのなしたる自然の分類の第四のものはこれである、しかし此第四は第一第二、第三の最も完全なる發展である、無内容なる虚無の謂ではない、第一即第四、第二即第四、第三即第四、第四即第四、第一である、普通には創造とは第一の立場よりの創造である、と考ふるから一がいかにして多を生ずるか、神がいかにして衆生を生ずるか等の問題が起るのである、第四が眞の創造の意味であつて一即多である、多即一である、一が先づあつて多が後に生ずるのでなければ多が先づあつて一がそれを統一するのでもない、多は多であることに於て一であり、一は一であることに於て多であるのである、プロテュヌスのエクスタシーに於ける一はかやうなものでなければならぬ、釋尊の成道によつて、否な成道と同時に森羅万象悉皆成佛すと稱せらるゝのも、クリトスの復活昇天によつて人間のエルブジツデがあがなはれたといふのも同じ意味ではないか、釋尊出世して初めて、衆生成佛すと見、クリスト生れて初めて原罪があがなはれたと見るのは時間上の意味であつてはならぬ、時間上よりいへば原罪はイエスの出生前に既に疑ひもなくあがなはれて居たのである、衆生の存するところ何處として佛の成道して居らぬ所はないのである、眞の愛とは又成道の端的である、そこで

は最早神ならぬ人間はないのである。若しそこに一箇半箇の原罪の存するあらば眞の愛といふことはできぬ、眞の愛とは一切萬物悉く自己なりといふことである、愛せらるゝものもなければ愛するものもない状態である、それ故にこれは普通にいふ愛執の愛ではない、プロテユスのいふやうな最高の認識なのである即ちあるものを認識することではなくして、直接に被認識者になることである、しかしこれをば被認識者が先づあつてそれに認識者が合一すると解せられてはならぬ、この處をば十分にあらはさんが爲にプロテユスは睿智の自己直觀の上位にエクスターゼを置いたのである、一は一にあらざれば一を知ることはいふ、この一をば他から見たならばそれは最早一ではない、寶藏論にいふ如く、若一知一即名爲二亦不名爲一である、吾々が神であると感じた時には最早神は何處かへ消え失せて居る、それであるから賓主未分の根本實在は知取にあらざして行取でなければならぬ、この行取によつて吾々は根本實在に體達し、こゝに一切のものを見、一切の源を發見するのである。

以上は不洗鍊、不統一なるたどり書きであつて一層精密に論ぜられねばならぬ點が無限に多くある至つて不満足なもので根本實在といふやうな尊きものをあらはすにはあまりに杜撰なものである、却つて寶玉に瑕瑾をつけ、平地に波瀾を起すものである、謗法の罪亦輕くないであらう。(未定稿)